名古屋芸術大学研究紀要第35巻　369～382頁（2014）

生成変化を思考することの教育学的意味
――ドゥルーズ＝ガタリの生成変化のシステム論にもとづいて――

Pedagogical Significance of Thinking about the Becoming: Systems Theory of Becoming in Deleuze and Guattari

森田　裕之　*Hiroyuki Morita*
（人間発達学部教養部会）

1. ドゥルーズ＝ガタリを読むことによって生成変化を考える

1-1. これまで教育学が語ることのなかった生成変化という変容

教育に関して考察する通常の教育学のテクストのなかに、あのオランダの画家ファン・ゴッホ（Vincent Van Gogh）の波乱に満ちた人生が描かれることはまずない。なぜならば、教育学は、ファン・ゴッホの人生を覗いてみても、そこに教育に関わる注目すべき出来事など見出せないので、ファン・ゴッホの人生を語ることにいかなる教育学的意味もないと考えているからである。ファン・ゴッホの絵画を読み解くときに欠かすことのできない貴重な資料を提供してくれるファン・ゴッホの人生も、教育学にとっては教育学的思考へと導いてくれる有意義な事例などではなく、打ち捨てられるべきがらくた同然なのだ。

しかしながら、このように教育学ががらくたとみなしているファン・ゴッホの人生をよく精査してみると、そこに教育学的に価値のあるものを発掘することができる。つまり、発達という概念を本源とする教育学はこれまで見落としてきたが、ファン・ゴッホの人生のなかには、発達とは異質でありながら、それと内在的なつながりをもつ未知の変容を発見することができるのである。このことを明らかにするためにファン・ゴッホの人生を簡単に振り返ってみよう。

1853年に牧師の子として生まれたファン・ゴッホは中等学校中退後、さまざまな職を転々とした末、27歳のときに画家になる決心をする。そうすると、ファン・ゴッホは、著名な巨匠たちの版画や技術書に掲載されている素描を模倣し、ドラクロワ（Eugène Delacroix）の色彩を模倣し、当時の前衛であった印象派の技法を模倣することによって絵画を学んでいく。そして1888年2月、パリから南フランスのアルルに赴き、そこで突如として、前例のない強烈な色彩とうねる筆触と大胆な構図とを確立するに至る。粘り強く繰り返し模倣しながら習作を続けてきた凡庸な人間が、単なる模倣を脱し、狂気の発作に襲われながら『ひまわり』『星月夜』『カラスのいる麦畑』といった瞠目すべき絵画を描き上げることができる芸術家になったのだ［Van Gogh 1958=1969-1970, 二見 2010］。この狂気＝芸術への変容は、われわれに馴染みの発達という変容として捉えることのできない得体の知れぬ謎の変容である。だが、ファン・ゴッホは発達することによって、既存のものを模倣する能力を獲得したのだから、この謎の変容と発達との間には内在的なつながりがある

のは明白である。

これまで教育学が問うことのなかったこうした謎の変容を「生成変化（devenir）」と呼び、それを理論的な水準のもとで考え抜いた思想家として、ドゥルーズ＝ガタリ（Gilles Deleuze/Félix Guattari）の名を挙げることができる。後の論述から明らかになるように、発達は生成という変容と次元を異にしつつ対をなしている［矢野 2008］ので、本論文ではこのドゥルーズ＝ガタリのテクストに依拠することによって、発達と生成の双対性との関係のもとで生成変化がどのような変容なのかを示したい。

1・2. ドゥルーズ＝ガタリのテクストをどう読むか

この目的を達成するために、ドゥルーズ＝ガタリのテクストをどのように読めばよいのか。たとえば、カント（Immanuel Kant）やヘーゲル（Georg Wilhelm Friedrich Hegel）の古典的な哲学書は、あたかも一個の有機体のように諸部分を統一した一つの体系をなしており、読者によって注解され解釈され説明され理解されることを待っている。それに対して、「構造主義（structuralisme）」を批判的に継承した「ポスト構造主義（post-structuralisme）」の思想家として、伝統的な哲学的諸概念に還元されることを許さない独創的な諸概念を自在に駆使するドゥルーズ＝ガタリが作り上げたテクストは、「リゾーム（rhizome）」を、すなわち諸々の断片が統一されることなく相互に接続した「多様体（multiplicité）」を形成しており、それを注解し解釈し説明し理解する訓詁学的な読み方を徹底的に拒否している。別のいい方をすれば、古典的な哲学書が読者に最初の頁から順次読み進めることを要請しているのにひきかえ、ドゥルーズ＝ガタリのテクストはどこから読み始めてもよいというように造形されている。ドゥルーズとガタリがドゥルーズ＝ガタリとして特異な協同作業のもとに生み出したこうした特異なテクストの読み方とは何か。

興味深いドゥルーズの読書論によれば、本の読み方には二通りあるという。「一つは本を箱（boîte）のようなものと考え、箱だから内部があると思い込む立場。これだとどうしても本のシニフィエを追い求めることになる。この場合、読み手がよこしまな心をもっていたり堕落していたりしたら、シニフィアンの探求に乗りだすことになるだろう。そして、次の本は最初の本に含まれた箱になったり、逆に最初の本を含む箱になったりするだろう。こうして注解（commentaire）が行われ、解釈（interprétation）が加えられ、説明（explication）を求め、本についての本を書き、そんなことが際限なく続けられるわけだ。もう一つの読み方では、本を小型の非意味形成機械（petite machine a-signifiante）と考える。そこで問題になるのは『これは機械だろうか。機械ならどんなふうに機能（fonctionnement）するのだろうか』と問うことだけだろう。読み手にとってどう機能するのか。もし機能しないならば、もし何も移行（passage）しないならば、別の本にとりかかればいい。こうした異種の読書法は強度による読み方（lecture en intensité）だ。つまり、何かが移行するか移行しないかということが問題になる。説明すべきことは何もないし、理解（compréhension）するこ

とも解釈することもありはしない。電源に接続するような読み方だと考えていい」[Deleuze 1990（1973）：17=2007（1992）：21]（1）。

この考え方によるならば、どんなシニフィエの追求も無効にしてしまうドゥルーズ＝ガタリのテクストは、後者の読み方によって読むしかない。つまり、ドゥルーズ＝ガタリのテクストを小型の非意味形成機械と捉え、「このテクストは何を意味するのか」ではなく「このテクストはどう機能するのか」と問いかけつつ、そのテクストを機能させ移行させ運動させる強度による読み方によってだ。

この点を踏まえて本論文の簡便なマップを示せば次のようになる。すなわち、強度による読み方を実践し、ドゥルーズ＝ガタリの生成変化に関わる議論をあたかも「機械技師(mécanicien)」のように機能させ移行させ運動させることによって、生成変化のシステム論を構成することが次の第２節の役割である（2）。それを引き継ぐ第３節では、生成変化を発達と生成の双対性との関わりで解明するために、このドゥルーズ＝ガタリの生成変化のシステム論を教育学的にさらに機能させ移行させ運動させる。そして、最終節となる第４節の論述は、こうして明らかになった生成変化を教育学が主題的に考えることが、発達について一元的に考える従来の教育学的思考に何をもたらすのかについて考察するために展開されることになる（3）。

2. ドゥルーズ＝ガタリの生成変化のシステム論の構成

2・1. 生成変化のシステム論の基盤をなす微粒子論の構成

上に予告しておいたように、本節の狙いは、ドゥルーズ＝ガタリの生成変化に関わる議論をもとにして生成変化のシステム論を構成することである。このように構成し組み立て、ドゥルーズ＝ガタリの生成変化のシステム論の全容を明らかにするのに先立って、それが位置している理論的水準をあらかじめ示しておく必要がある。ドゥルーズ＝ガタリの生成変化のシステム論は、意識が労働という否定によって高まる運動の論理であり、発達という概念の思想的起源となっている［堀尾 1984, 矢野 2008］ヘーゲルの弁証法を批判しつつ、人間が超人に肯定的に変容する運動であり、生成変化という概念の思想的起源となっている［森田 2012］ニーチェ（Friedrich Wilhelm Nietzsche）の価値転換という思想を継承する理論的ポジションを占めている。このようにヘーゲルとニーチェという二つの座標軸のもとで捉えられるドゥルーズ＝ガタリの生成変化のシステム論を構成する作業を始めることにしよう。

何よりもまず自然に関する理論を立ち上げなければならない。それというのも、その理論がドゥルーズ＝ガタリの生成変化のシステム論の理論的基盤になるからだ。自然について論じたドゥルーズ＝ガタリの議論［Deleuze/Guattari 1980：53-94=2010（1994）上巻：91-161］を強度による読み方によって作り替えるならば以下のようになる。現実の自然は微視的視点から捉えられる。すなわち、大地は幾重にも重なった多くの層に分かれていて、それぞ

れの層は数多くの堆積物に細分化されていて、個々の堆積物は多数の無機物に細分化されていて、各々の無機物は……というように際限なく細分化されている。また、大地の上を多くの生命体が占拠していて、それぞれの生命体は数多くの器官に細分化されていて、個々の器官は多数の有機物に細分化されていて、各々の有機物は……というように際限なく細分化されている、というように捉えられる。このように捉えられた現実の自然は、無限小の諸部分をなす「諸微粒子（particules）」が相互に明確に分節化した静的なものとしてのスタティックな差異的諸微粒子として抽象化することができる。

このとき、「現実的な（actuel）」ものであるこのスタティックな差異的諸微粒子が立ち現れるためには、ダイナミックな分子状諸微粒子が「潜在的な（virtuel）」ものとして先行的に存在していなければならないと考えられる。つまり、諸微粒子が「と……と……と……（et... et... et...）」という仕方で接続し合った動的なものとしてのダイナミックな分子状諸微粒子が、潜在的水準のもとでその形態を変え流動している。そして、こうしたダイナミックな分子状諸微粒子が、「凝固（coagulation）」し、一が二になり二が四になり……というように二分法的に「分節化（articulation）」することによって、諸微粒子間の緊密な紐帯が切断されたスタティックな差異的諸微粒子として現実化するというわけだ。

このスタティックな差異的諸微粒子とダイナミックな分子状諸微粒子との関係を具象的な次元で述べれば次のようになろう。「たしかに物理化学的な地層（strate）［＝物理化学的な物質］が物質のすべてを説明するとは考えられない。形式化されない下位分子的な物質というものがあるのだ。同じように、有機的な地層［＝有機的な生命］も生命のすべてを説明するわけではない。有機体とは、生命がみずからを制限するために自身に対立させるものである。非有機体的であるからこそ、なおさら強度的で強力な生命というものがあるのだ」［Deleuze/Guattari 1980：628=2010（1994）下巻：303 角括弧内は筆者］。物理化学的な地層と有機的な地層とから構成された現実的な自然、すなわちスタティックな差異的諸微粒子の具象的表現である現実的な自然が、自然のすべてを汲み尽くすことができるわけではない。形式化されない下位分子的な物質と強度的で強力な生命とからなる潜在的な自然、すなわちダイナミックな分子状諸微粒子の具象的表現である潜在的な自然があらかじめなくてはならないのだ。そして、ダイナミックな分子状諸微粒子がスタティックな差異的諸微粒子へと凝固分節化＝現実化するときの凝固分節化＝現実化は、「地層化（stratification）」と呼ばれる。

この地層化によって立ち現れたスタティックな差異的諸微粒子は、どこまでも不動のままである。このことは、スタティックな差異的諸微粒子が自己自身のなかに閉じ込められ「捕獲（capture）」されていることとして捉えることができる。したがって、それは自己自身から「逃走（fuite）」することによって、ダイナミックな分子状諸微粒子として潜在化し、みずからを解放することになる。この逃走＝潜在化は、地層化に対して「脱地層化（déstratification）」と名づけられる。

こうして、ダイナミックな分子状諸微粒子がスタティックな差異的諸微粒子に地層化し、後者が反転して前者に脱地層化し……というようにどこまでも変容していき、ダイナミックな分子状諸微粒子とスタティックな差異的諸微粒子とは円環的サイクルを形成することになる。そして、この円環的サイクルのなかで出現するスタティックな差異的諸微粒子は、それ以前のそれとは不連続的に差異化しずれている新たな現実的なものなのである。このように、自然の総体は、諸微粒子の永遠回帰するシステムとして抽象化される[(4)]。

2-2. 微粒子論にもとづく記号論の構成

このとき、社会はどのように描かれるのだろうか。このことに関するドゥルーズ＝ガタリの議論［Deleuze/Guattari 1980：140-184=2010（1994）上巻：231-303］をやはり強度による読み方によってパラフレーズすれば、社会は次のような諸記号の動態的なシステムとして抽象化されることになる。現実的な水準において、スタティックな差異的諸微粒子に対して鋭い対照をなすものとして、スタティックな未分化的連続体の存在を想定することができる。このスタティックな未分化的連続体は、すべてが入りまじり錯綜して渾然一体となり、区別できるものなど何一つない混沌だから秩序化される必要がある。したがって、それに秩序を与える主体として「超越（transcendant）」項という他者が生成する。そうすると、超越項はスタティックな未分化的連続体を俯瞰するはるか高みから、一を二にし二を四にし……というようにそれを二分法的に分割し分節化させる。この分節化によって、スタティックな差異的「諸記号（signes）」が立ち現れるに至る。こうして成立したスタティックな差異的諸記号という「意味性（signifiance）」は、超越項を「中心（centre）」とし、それを渦巻き状に取り巻いている「拡散的な円環的組織網（réseau circulaire irradiant）」として捉えられる。このとき、中心と拡散的な円環的組織網の具象的表れはそれぞれ、専制君主（despote）とそれによって支配された「臣民（sujets）」とであると考えられる。

こうした拡散的な円環的組織網において、「一団の記号が拡散的な円環的組織網から離脱し自立的に動き始め、まるで細く開いた通路に吸い込まれていくように直線の上を急進する」［Deleuze/Guattari 1980：152=2010（1994）上巻：252 強調はドゥルーズ＝ガタリ］。いいかえれば、スタティックな差異的諸記号という記号系から一団の記号が逃走する。この逃走している一団の記号が、差異的諸記号として停止することによって、差異的諸記号がスタティックな差異的諸記号の外部として姿を現す。この逃走は「脱領土化（déterritorialisation）」と、停止は「再領土化（reterritorialisation）」とそれぞれ呼ばれる。

こうして脱領土化し再領土化することによって成立した差異的諸記号は、絶対的に高位の存在である超越項という他者をもたないので、「主体（sujet）」として自律的たろうとする。つまり、差異的諸記号はそれよりも相対的に高位の存在である「内在（immanent）」項を自己のモデルとして定立し、それに同一化しようとし、さらに内在項に同一化した差異的諸記号は再び、より高次の内在項を打ち立て、それに同一化しようとするのだ。「権力の

超越的な中心（centre transcendant de pouvoir）などもはや必要ではなく、むしろ『現実』と一体となり、規格化を行う内在的な権力（pouvoir immanent）が必要となる」[Deleuze/Guattari 1980：162=2010（1994）上巻：268]。この内在項を目指して展開される運動は、ダイナミックな差異的諸記号が内在項に向けて一方向に脱領土化し、そこに同一化しつつ再領土化することが繰り返される「線形的プロセス（procès linéaire）」として捉えることができる。そして、この線形的プロセスの具象的表れの一つが、マルクス（Karl Heinrich Marx）によってG（＝貨幣）-W（＝商品）-G´（＝増殖した貨幣）という価値の自己増殖運動として定式化された［Marx 1962-1963（1867-1894）=1969-1970］「資本主義（capitalisme）」(5) なのである(6)。

2-3. 記号論から微粒子論へと横断する生成変化の成立

以上の論述から、自然を、地層化と脱地層化によって機能している微粒子論として抽象化し、社会を、微粒子論にもとづき脱領土化と再領土化を組み込んだ記号論として抽象的に描出する生成的なシステム論が構成される。このとき、ドゥルーズ＝ガタリによれば、資本主義という形象として具象的に表れる線形的プロセスにおいて、ダイナミックな差異的諸記号という記号系が内在項に再領土化すると、その記号系から一団の記号が脱領土化することによって、スタティックな差異的諸記号の外部であるダイナミックな差異的諸記号には収まりきらない外部の外部、すなわち絶対的外部が立ち現れるという。そして、この脱領土化をドゥルーズ＝ガタリは「生成変化」と呼ぶ［Deleuze/Guattari 1973（1972）：263-312=2006下巻:20-93］。このとき、絶対的外部、別言すれば「絶対的極限（limite absolue）」「外的極限(limite extérieure)」とは一体何か。それは2-1で見た現実的なものであるスタティックな差異的諸微粒子とは異なった現実的なもの、すなわち現実的なものであるダイナミックな分子状諸微粒子であると考えることができる。

このように、再領土化したダイナミックな差異的諸記号から一団の記号がダイナミックな分子状諸微粒子に生成変化する。このプロセスにおいて、一団の記号は人間として具象的に表れると捉えることができるのに対して、ダイナミックな分子状諸微粒子の具象的表現はどのように考えたらよいのだろうか。それは資本主義からはみ出した人間ならざる「特異性（singularité）」であり、そうした特異性を「狂気」と呼ぶことにする。微粒子と記号とは位相を異にしているので、ダイナミックな分子状諸微粒子はあるダイナミックな差異的諸記号に解釈されるだけではなく、その諸記号とは異なった他のダイナミックな差異的諸記号に同じように解釈されるだけでなく……というように、さまざまなダイナミックな差異的諸記号に同時に解釈されると考えられる。このことから、ダイナミックな分子状諸微粒子の具象的表現である狂気も、同時にさまざまに解釈されることになる。つまり、それは多数多様な意味に同時に開かれ、どれほど語っても語り尽くせぬ「多義性（polyvocité）」なのである。この多義性を「芸術」と呼ぶことにしよう。

このとき、この狂気＝芸術がその歴史上の表れを見出すのは、たとえば次のもののなか

にである。すなわち、第1節で見た狂気＝芸術としてのファン・ゴッホ［Deleuze/Guattari 1991：154-188=2012（1997）：231-283］のなかにであり、馬の首にしがみつき発狂し、狂気の手紙を書き送るニーチェ［Deleuze/Guattari 1973（1972）：27-29=2006 上巻：48-50］のなかにであり、チェコのユダヤ人としてドイツ語で「マイナー文学（littérature mineure）」を創造するカフカ（Franz Kafka）［Deleuze/Guattari 1975=1978］のなかであり、諸器官の統一化としての有機体ではなく、諸器官の多様体によって満たされた「器官なき身体（corps sans organes）」を生きるアルトー（Antonin Artaud）［Deleuze/Guattari 1980：185-204=2010（1994）上巻：305-340］のなかにである。

上の考察から明らかなように、再領土化したダイナミックな差異的諸記号から一団の記号がダイナミックな分子状諸微粒子に生成変化することは、人間が狂気＝芸術に生成変化することとして具象的に表れる。この具象的表れとしての生成変化のプロセスは、たとえば以下のような形をとると考えられる。すなわち、人間が人間として現実的な自然を「模倣（imitation）」し、その模倣が人間としてこれ以上現実的な自然に類似し近づくことができない極点に達したとき、人間は人間を脱し狂気＝芸術に生成変化する。そして、それと同時に、現実的な自然のほうも潜在的な自然に生成変化（＝脱地層化）する。つまり、極限的な模倣を越えて、生成変化が発動するのである。このことは、ファン・ゴッホが執拗に模倣することによって狂気＝芸術に生成変化した先の事例にぴったりと符合している。

このような「生成変化は［人間と現実的な自然との間での］関係相互の照応（correspondance de rapports）ではない。かといって［人間の現実的な自然に対する］相似（ressemblance）でも模倣でもないし、結局は同一化（identification）でもない。……中略……生成変化とは系列（série）にしたがって進歩（progression）することでも退行（régression）することでもない。……中略……生成変化は進化（évolution）ではないということ、少なくとも血統（descendance）や系統（filiation）にもとづく進化ではないということだけは明確にしておかなければならない。……中略……［生成変化は］分化の低いものから高いものへと向かうのではないし、遺伝にもとづく系統的進化（évolution filiative héréditaire）の形をとるのではない」［Deleuze/Guattari 1980：291-292=2010（1994）中巻：158-160 角括弧内は筆者］。

人間と現実的な自然とが形成しているのは、一が二になる「樹木（arbre）」状組織における対立的な二項ではなくて、「同盟（alliance）」「共生（symbiose）」「生成変化のブロック（bloc de devenir）」「（〈……と……〉としての）中間（milieu）」「線形の多様体（multiplicité linéaire）」要するに「リゾーム」である。人間と現実的な自然は、それを見下ろすことになる超越的な原点によって成立する平面ではなくて、人間と現実的な自然がいっしょに存立していることで成立している「共立性平面（plan de consistance）」を構成しているのだ。そして、この「リゾーム」「共立性平面」において二重の生成変化が生じる。

3. ドゥルーズ＝ガタリの生成変化のシステム論の教育学的展開

3・1. 相互に次元を異にした発達と生成の双対性

このように、ドゥルーズ＝ガタリの生成変化をめぐる議論を機能させ移行させ運動させることによって、記号論から微粒子論へと横断し、両者を結びつける生成変化のシステム論を構成することができる。生成変化を発達と生成の双対性の関係のもとで明らかにするためには、このドゥルーズ＝ガタリの生成変化のシステム論を教育学的にさらに機能させ移行させ運動させなければならない。

生成変化のシステム論の現実的水準において、再領土化したダイナミックな差異的諸記号に対照的なものとして、ダイナミックな未分化的連続体が立ち現れると考えることができる。このダイナミックな未分化的連続体は、その形態を変え流動しており不安定な混沌なので、安定した秩序へと作り替えられなければならない。それゆえに、再領土化したダイナミックな差異的諸記号は、ダイナミックな未分化的連続体を受容体のなかに収容することによって停止させ、さらに一を二にし二を四にし……というように二分法的に分割し分節化させる。このときの分節化は、ソシュール（Ferdinand de Saussure）の記号体系における分節化［Saussure 2005（1916）=1972（1940）］と同じように、再領土化したダイナミックな差異的諸記号の自由裁量による分節化であり、原理的にはどのようにでも行うことができる徹頭徹尾恣意的な分節化である。これによって、ダイナミックな未分化的連続体は恣意的な差異的諸記号を包摂した受容体に変容することになる。

このとき、この受容体はどのように考えたらよいのだろうか。丸山圭三郎によれば、ソシュールの恣意的・差異的な記号体系は、箱のなかに押し込められた多数の風船としてイメージされるという。このとき、個々の記号のイメージである風船は、圧搾空気が入っているものとする。もし、この箱のなかの風船を一つ取り出すと、その風船が占めていた場所は、相互の圧力関係のもとでひしめき合っていた他の風船が全部ふくれ上がることで埋められてしまうのである［丸山 1981：96-97］。恣意的な差異的諸記号はこのソシュールの恣意的・差異的な記号体系と同じように考えることができ、受容体は上記の箱のようなものとしてイメージされる。このことから、受容体は恣意的な差異的諸記号の恣意性と差異性を成立させ、さらに維持しているものといえよう。

こうした受容体を何と呼んだらよいか。この名づけを行うために、プラトン（Platōn）の『ティマイオス』のなかに登場する「コーラ（khôra）」という言葉に関するデリダ（Jacques Derrida）の議論［Derrida 1993=2004］を取り上げてみよう。コーラは一般に場所、容器、苗床、国家などを意味するギリシア語である。ところが、デリダによれば、プラトンニズムを特徴づける階層秩序的二項対立、すなわち叡智的なものと感性的なものや、永遠の存在と生成状態にあるイマージュといった、前項が後項に比して価値がある階層秩序的二項対立が成立するには、この階層秩序的二項対立を包摂し受け入れる受容体がなくてはならないという。そして、デリダは、この受容体を指し示す言葉がコーラなのだという。コーラこそ

は、階層秩序的二項対立が書き込まれる場であり、「みずからを刻印するありとあらゆるものの記入（inscription）の場を象るものなのだ」[Derrida 1993：52=2004：44 強調はデリダ]。このデリダの考察を踏まえ、恣意的な差異的諸記号を包摂しているものとしての受容体の呼び名として「コーラ」という言葉を採用することにしたい(7)。

そうすると、再領土化したダイナミックな差異的諸記号がダイナミックな未分化的連続体をコーラのなかに収容し分節化させることによって、ダイナミックな未分化的連続体という最も低次の初期段階は、諸々の中間段階を経て、恣意的な差異的諸記号を包摂したコーラという最も高次の最終段階へと変容することになる。そして、この恣意的な差異的諸記号を包摂したコーラは、再領土化したダイナミックな差異的諸記号のなかに組み入れられ編入されていると考えることができる。このときの変容を「発達」と呼ぶことにしよう。この発達において、低次の段階とそれより高次の段階との間には段階的差異があるものの、自己同一性は維持されている。

この自己同一性が維持される変容である発達が成立するとともに、それと対をなす変容として、次のような自己同一性が破綻する変容が生起すると考えられる。すなわち、それは、恣意的な差異的諸記号を包摂したコーラが、何も入っていない空虚なコーラになることを経て、新しい恣意的な差異的諸記号を包摂したコーラになるときの変容である。このとき、空虚なコーラが、再領土化したダイナミックな差異的諸記号の外にあるのに対して、新しい恣意的な差異的諸記号を包摂したコーラは、再領土化したダイナミックな差異的諸記号のなかに編入されていると考えられる。そして、恣意的な差異的諸記号を包摂したコーラと新しい恣意的な差異的諸記号を包摂したコーラとの間には自己同一性が成立せず、両者は質的に異なり共約することが不可能であるので、両者の間で優劣を比較することができない。矢野智司［矢野 2008］にならい、こうした質的差異化を示す変容を、発達に対して「生成」と呼ぶことにする。

3・2. 発達と生成の双対性と生成変化との関係

こうして、対をなしつつ相互に次元を異にした発達と生成という諸変容が生じる。ここで、この諸変容に関わる具象的表現について考えてみよう。ダイナミックな差異的諸記号の脱領土化と再領土化の反復によって描かれる線形的プロセスが資本主義として具象的に表れ、生成変化することになる一団の記号が人間として、生成変化によって形成されたダイナミックな分子状諸微粒子が狂気＝芸術としてそれぞれ具象的に表れるとき、ダイナミックな未分化的連続体の具象的表現は子どもであり、その連続体から発達によって形作られた恣意的な差異的諸記号を包摂したコーラの具象的表現は人間であると考えることができる。また、生成という変容は、死と再生を引き起こす出来事として具象化すると考えられ、この出来事の一つとして遊びを挙げることができる。このように、人間（＝理性）と狂気の二項対立と、人間（＝大人）と子どもの二項対立とは、資本主義の誕生にともなっ

て立ち現れる通時的な産物なのであり、このことが歴史上にどのように表れるかは、フーコー（Michel Foucault）[Foucault 1972 (1961) =1975] とアリエス（Philippe Ariès）[Ariès 1973 (1960) =1980] の緻密な歴史研究によって明らかにされている。

このような具象的表現をもつ発達と生成の双対性に対して、前節で論じた生成変化はどのように捉え直されるのか。生成変化について改めて考えるために有効な手立ては、位相という新たな枠組みを導入することである。ダイナミックな未分化的連続体が、恣意的な差異的諸記号を包摂したコーラへと段階的に上向する一方向的な発達は、記号の論理が支配している記号的位相のなかで生じると考えることができる。また、恣意的な差異的諸記号を包摂したコーラが空虚なコーラになることを経て、新しい恣意的な差異的諸記号を包摂したコーラへと質的に差異化する回帰的な生成が行われるのも、記号的位相のなかでである。こうした同一位相内での諸変容に対して、生成変化は、再領土化したダイナミックな差異的諸記号のなかの一団の記号が、記号的位相から記号の論理の及ばぬ微粒子的位相へと移行することによって、ダイナミックな分子状諸微粒子へと全面的に変貌するときの位相間変容として捉え直される。

このように、生成変化は位相間の壁を貫き突破する越境運動であり、人間として具象的に表れる一団の記号を決定的に越え出る変容であって、その思想的起源を、人間（＝反動的な力）が超人（＝能動的な力）になるニーチェの価値転換という思想 [Nietzsche 1968 (1883-1885) =1967-1970] のなかに求めることができる。こうした生成変化は、発達と生成の双対性とどのような関係にあるのか。このことは、これまでの論述を自己言及的に問うことによって示すことができよう。ドゥルーズ＝ガタリの生成変化のシステム論をもとにして発達と生成の双対性を理論的に導出してきたこれまでの論述展開は、どのように捉え直されるのか、と問う必要があるのだ。その捉え直しはこうである。諸記号があらかじめ変容主体としてあることによって、諸記号による変容が生起するのではなくて、変容が発動してから事後的に変容前に遡り、諸記号が変容主体となる。このとき、変容は同一位相のなかで開始されるのではなく、記号的位相と微粒子的位相との間において位相間越境としての生成変化として始まるのであり、この生成変化以前に遡り回顧的に、位相間において一団の記号としての諸記号が変容主体となる。そうするとただちに翻って、記号的位相のなかに出現したダイナミックな未分化的連続体が変容主体となり、それによる発達が記号的位相内において生じる。そしてそれにともなって、その発達と対をなす変容として、恣意的な差異的諸記号を包摂したコーラによる生成が記号的位相内で起こる。こう考えられるので、生成変化は相互に次元の異なった発達と生成の双対性の理論的前提となっているわけである。

4. 生成変化を教育学が考えることは従来の教育学的思考に何をもたらすか

こうした生成変化は、これまで教育学によって問われることはなかった。しかしながら、発達と生成の双対性の理論的前提である生成変化を、発達を中心概念として構築されてい

る教育学が考えることは無意味ではないはずである。このことを明らかにするために、教育学が発達と生成の双対性という問題圏に対してどのようにアプローチするのかを考えてみよう。

発達と生成の双対性という問題圏に直面するとき、教育学は発達という概念を本源としているから、生成を排除したり生成を発達に還元したり生成を発達のなかに回収したりすることによって、発達について一元的に思考することになると考えることができる。たとえば、生成が発達のなかに回収されるとき、生成の具象的表現である死と再生の出来事の一つである遊びは、遊ぶ人間そのものが質的に差異化する自己目的的変容としてではなく、人間のなかの諸能力が段階的に上向する発達という変容のための手段として位置づけられることになる。要するに、遊びを通して社会性が育ち、情操が育成され、身体能力が高まると考えられるわけだ。矢野も指摘するように［矢野 2006］、この思考法は実際、従来の教育学的な遊び研究のなかに見出すことができる。

このように、教育学は発達と生成の双対性という複合的で多次元的な問題圏を発達という単次元的な問題に巧みに変換し、発達へと思考を集中させる。こうした教育学に対して、生成変化という問題を提起するならば、それは単に新たな問題を付け加えることではない。提起された生成変化という問題は、発達と生成の双対性という教育学的問題圏の理論的前提であると同時に、その教育学的問題圏の外部を形成すると考えられる。そうだとするならば、発達と生成の双対性という教育学的問題圏の外部を教育学が主題化することは、どうして必要なのか、それには何の意味があるのだろうか。その外部に関して考えることは、発達について一元的に考える従来の教育学的思考の領域を明確に確定するばかりでなく、その確定を刺激し触発する。それによって、従来の教育学的思考はみずからを創造的に組み替え新たに変容するに至るだろう。別のいい方をすれば、教育学がこれまで論じてこなかった生成変化を思考することは、従来の教育学的思考を機能させ移行させ運動させるはずだ(8)。

【註】

（1）本論文での引用文は、筆者が邦訳を参照しつつ原文を訳出したものである。

（2）本論文では、ドゥルーズ＝ガタリの議論をシステム論として構成し立ち上げていくことになる。ドゥルーズの議論をシステム論として読み解いた研究として、檜垣立哉の研究［檜垣 2002,2009,2010］がある。構造主義を代表例とする典型的なシステム論におけるシステムの絶対性と決定性に対して、檜垣はドゥルーズのシステム論におけるシステムを、生成する未決定的なシステムとして捉える。本文の今後の論述からわかるように、本論文で構成されるシステム論におけるシステムもまた、生成する未決定的なシステムである。また、本論文でのドゥルーズ＝ガタリに関する論述については、上記の檜垣の研究のほかに、とりわけ浅田彰［浅田 1983,1984］、國分功一郎［國分 2013］、アリエズ（Éric Alliez）［Alliez 1993,1996=2002］、ハート（Michael Hardt）［Hardt 1993=1996］、マルタン（Jean-Clet Martin）［1993=1997］、バディウ（Alain Badiou）［Badiou 1997=1998］の研究を参照した。

（3）筆者はドゥルーズ＝ガタリの議論の総体を、自然と社会とその二者にもとづく教育とを包括的に説明することができる自然-社会-教育理論へと作り替える機能的で移行的で運動的な試みを行った［森田 2012］。この研究が発表されるまで、日本の教育学の分野ではドゥルーズ＝ガタリの議論は部分的な摂取にとどまり、既存の教育学に対してドゥルーズ＝ガタリの議論全体がどのような教育世界を開くのかという観点からそれを本格的に論じた研究はなかった。本論文では、デリダの議論を新たに援用しながら、この自然 - 社会 - 教育理論を、よりシンプルで洗練された形で構築し直すことによって、上記の研究で考察することがなかった教育学と生成変化との関係についての問題、すなわち教育学がこれまで問うことのなかった生成変化を主題化することはどのような意味をもつのかという問題を解明することを目指す。また、海外には、ドゥルーズ＝ガタリの議論を教育学に関連づけた先行研究のうちで書籍という形で刊行されたものとして、二つの研究［Semetsky 2008］［Olsson 2009］を挙げることができる。だが、これらの研究はどれも、本論文のような機能的で移行的で運動的な試みではない。

（4）ドゥルーズは「生成の肯定（affirmation du devenir）」→「存在の肯定（affirmation de l'être）」→生成の肯定……というように続く創造的な肯定的運動としての永遠回帰の思想をニーチェの根本思想の一つとして捉えている［Deleuze 1962=1982（1974),1965=1998（1985)］。ドゥルーズ＝ガタリの生成変化のシステム論の基盤をなす諸微粒子の永遠回帰するシステムは、その思想的原型をこのニーチェの永遠回帰の思想のなかに求めることができる。

（5）線形的プロセスのもう一つの具象的表れは、自治的な「都市（ville）」である。この都市については、『千のプラトー』の第13章［Deleuze/Guattari 1980：528-591=2010（1994）下巻：153-245］を参照。

（6）以下の点を補足しておこう。超越項という他者が規定しているスタティックな差異的諸記号は、「シニフィアン的記号系（sémiotique signifiante）」と呼ばれる。このシニフィアン的記号系は周期的に、スタティックな未分化的連続体になることを経て再び立ち現れることで組み替えられ更新されると考えられる。この運動は供儀として具象化する。こうしたシニフィアン的記号系より後に成立する記号系、すなわち内在項に向けて脱領土化し再領土化するダイナミックな差異的諸記号系は、「ポスト・シニフィアン的記号系（sémiotique post-signifiante）」と呼ばれる。このとき、シニフィアン的記号系を基準として、ポスト・シニフィアン的記号系とは別に次の二つの記号系を想定することができる。一つ目は、シニフィアン的記号系の成立より以前にすでに成立していた記号系、すなわち超越項が分節化させ規定する以前に成立していた記号系だ。それは、あるスタティックな差異的諸記号が一方で第二のそれを規定しており、他方で第三のそれによって規定されている記号系、すなわち相互に規定し合っている多数（多数とは三以上）のスタティックな差異的諸記号である。それは「プレ・シニフィアン的記号系（sémiotique pré-signifiante）」と名づけられ、その具象的表れは「未開社会（société primitive）」である。もう一つは、シニフィアン的記号系に対立している記号系、すなわち何によっても規定されていないダイナミックな分子状諸記号である。それは「逆シニフィアン的記号系（sémiotique cotre-signifiante）」と名づけられ、これはたとえば「遊牧民（nomade）」という形態をとる「戦争機械（machine de guerre）」として具象的に表れる。

（7）デリダのコーラに関する議論については、東浩紀の卓越した論考［東 1998］を参照。

（8）日本の教育学を見渡すとき、発達について一元的に考える従来の教育学的思考を新たに組み替えようとする最も優れた試みとして、次の三つを挙げることができる。①発達を死後へと時間的に延長することによって、生 - 死 - 死後 - 再生へとつながっていく円環的ライフサイクルについて考える教育学的思考へと組み替えようとする西平直の試み［西平 2010（1997)］。②発達を相互形成へと空間的に拡大することによって、ライフサイクルを通しての異世代間相互形成について考える教育学

的思考へと組み替えようとする田中毎実の試み［田中 2003］。③発達から排除されたり発達に還元されたり発達のなかに回収されたりしている生成を見出すことによって、相互に次元を異にした発達と生成の双対性について考える教育学的思考へと組み替えようとする矢野智司の試み［矢野 2008］。これらの先行研究はいずれも、従来の教育学的思考の内部から働きかけることによって、それを新たに組み替えようとしている。それに対して、本論文の結論は、発達と生成の双対性という問題圏の外部についての思考、つまりその問題圏を発達という問題に縮減し、その発達について一元的に考える従来の教育学的思考の外部についての思考が、その従来の教育学的思考の組み替えを可能にすることを示すものである。

引用参考文献

浅田　彰 1983『構造と力―記号論を超えて』勁草書房

――　1984『逃走論―スキゾ・キッズの冒険』筑摩書房

東　浩紀 1998『存在論的、郵便的―ジャック・デリダについて』新潮社

國分功一郎 2013『ドゥルーズの哲学原理』岩波書店

田中毎実 2003『臨床的人間形成論へ―ライフサイクルと相互形成』勁草書房

西平　直 2010（1997）『魂のライフサイクル―ユング・ウィルバー・シュタイナー』東京大学出版会

檜垣立哉 2002『ドゥルーズ―解けない問いを生きる』日本放送出版協会

――　2009『ドゥルーズ入門』筑摩書房

――　2010『瞬間と永遠―ジル・ドゥルーズの時間論』岩波書店

二見史郎 2010『ファン・ゴッホ詳伝』みすず書房

堀尾輝久 1984『子どもを見なおす―子ども観の歴史と現在』岩波書店

丸山圭三郎 1981『ソシュールの思想』岩波書店

森田裕之 2012『ドゥルーズ＝ガタリのシステム論と教育学―発達・生成・再生』学術出版会

矢野智司 2006『意味が躍動する生とは何か―遊ぶ子どもの人間学』世織書房

――　2008『贈与と交換の教育学―漱石、賢治と純粋贈与のレッスン』東京大学出版会

Alliez, É., 1993 *La signature du monde, ou qu'est-ce que la philosophie de Deleuze et Guattari?*, Cerf.

――　1996 *Deleuze philosophie virtuelle*, Synthélabo. = 2002 長友文史訳「ドゥルーズ、潜在の哲学」『現代思想』第 30 巻 10 号　青土社

Ariès, Ph., 1973（1960）*L'enfant et la vie familiale sous l'Ancien Régime*, Seuil. = 1980 杉山光信・杉山恵美子訳『〈子供〉の誕生―アンシァン・レジーム期の子供と家族生活』みすず書房

Badiou, A., 1997 *Deleuze: la clameur de l'être*, Hachette Littératures. = 1998 鈴木創士訳『ドゥルーズ―存在の喧騒』河出書房新社

Deleuze, G., 1962 *Nietzsche et la philosophie*, PUF. = 1982（1974）足立和浩訳『ニーチェと哲学』国文社

――　1965 *Nietzsche*, PUF. = 1998（1985）湯浅博雄訳『ニーチェ』筑摩書房

――　1990（1973）"Lettre à un critique sévère," *Pourparlers: 1972-1990*, Minuit. = 2007（1992）宮林寛訳「口さがない批評家への手紙」『記号と事件―1972-1990 年の対話』河出書房新社

Deleuze, G./Guattari, F., 1973（1972）*L'anti-Œdipe*, Minuit. = 2006 宇野邦一訳『アンチ・オイディプス―資本主義と分裂症』上下　河出書房新社

――　1975 *Kafka: pour une littérature mineure*, Minuit. = 1978 宇波彰・岩田行一訳『カフカ―マイナー文学のために』法政大学出版局

—— 1980 *Mille plateaux*, Minuit. = 2010（1994）宇野邦一ほか訳『千のプラトー―資本主義と分裂症』上中下　河出書房新社

—— 1991 *Qu'est-ce que la philosophie?*, Minuit. = 2012（1997）財津理訳『哲学とは何か』河出書房新社

Derrida, J., 1993 Khôra, Galilée. = 2004 守中高明訳『コーラ―プラトンの場』未來社

Foucault, M., 1972（1961）*Histoire de la folie à l'âge classique*, Gallimard. = 1975 田村俶訳『狂気の歴史―古典主義時代における』新潮社

Hardt, M., 1993 *Gilles Deleuze: an apprenticeship in philosophy*, University of Minnesota Press. = 1996 田代真ほか訳『ドゥルーズの哲学』法政大学出版局

Martin, J.-Clet, 1993 *Variations: la philosophie de Gilles Deleuze*, Payot. = 1997 毬藻充・黒川修司・加藤恵介訳『ドゥルーズ／変奏♪』松籟社

Marx, K., 1962-1963（1867-1894）*Das Kapital: Kritik der politischen Ökonomie*, Dietz. = 1969-1970 向坂逸郎訳『資本論』全９巻　岩波書店

Nietzsche, F. W., 1968（1883-1885）*Also sprach Zarathustra: ein Buch für alle und keinen (1883-1885)*, W. de Gruyter. = 1967-1970 氷上英廣訳『ツァラトゥストラはこう言った』上下　岩波書店

Olsson, L. M., 2009 *Movement and experimentation in young children's learning : Deleuze and Guattari in early childhood education*, Routledge.

Saussure, F., 2005（1916）*Cours de linguistique générale*, Payot & Rivages. = 1972（1940）小林英夫訳『一般言語学講義』岩波書店

Semetsky, I.(ed.), 2008 *Nomadic education: variations on a theme by Deleuze and Guattari*, Sense Publishers.

Van Gogh, V., 1958 *The complete letters of Vincent van Gogh: with reproductions of all the drawings in the correspondence*, New York Graphic Society. = 1969-1970 小林秀雄・滝口修造・富永惣一監修『ファン・ゴッホ書簡全集』全６巻　みすず書房